

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑦『ハッピー!』

迫 共
(浜松学院大学)

波間信子さんの『ハッピー!』は中途失明の女性が子育てをしていく物語です。障害と生きづらさ、子どもたちの成長、盲導犬やペットの尊厳など考えさせられることがたくさんあった作品です。

22歳のときに事故で失明した主人公の香織は「あきらめ上手にならなくちゃ、盲人なんてやってられない。見えなくなったその日から、あきらめなきゃならないことの連続だった」と口にします(第1巻)。盲導犬の訓練を終えたハッピーと出会い、香織は盲導犬との暮らしに慣れるために歩く練習をします。炎天下で迷子になり、水が飲めずに弱っているハッピーに気づかない香織に、声をかけた男性がいました。「ノドがカラカラなんじゃないかな。足の裏が痛んでいる。焼けた道をずいぶん歩いたみたいだね」

香織は「人の世話にばかりなることがたまらなくて。だれかに助けてもらわなきゃ、なにひとつ満足にできないんだわ、私は」と嘆きますが、彼は「それはだれもでしょ? あなたの犬を助けるチャンスに会えて、今日がいい日になりましたよ、ぼくは」と返答します。それが獣医の昇(のぼる)でした。やがて香織は昇と結婚。二人の子どもを出産し、子育てをしていきます。

第5巻、長男明光(あきみつ)の出産後、2ヶ月ぶりにハッピーをつれて外出する香織は、よその赤ちゃんの鳴き声に立ち止まります。するとそこに自動車が走ってきて、クラクションと大きなブレーキ音をたて、自動車は香織とハッピーの直前でストップします。香織たちは、なんとカーブを曲がった先の道路の真ん中に立ち止まっていたのでした。

香織は明光をおぶっているときに事故に巻き込まれる夢を見て、恐怖で目を覚まし、しばらくハッピーと外出することが怖くて仕方がなくなります。勇気を振り絞って明光を背負い、ハッピーとともに昇の動物病院まで行くことにした香織。両親は「あと、ついていってやって」「いや、ハッピーの気を散らすだけだ」と、あえて香織とハッピーに任せる決心をします。

信号で立ち止まっていると、通りすがりの人が声をかけてくれました。「あの、犬が信号

の色を見分けて渡っているんじゃないですよ。青だと知らせたほうが助かります?」。香織は「ええ、とても助かります」と答えます。まわりの人たちに支えられていつもの道をようやく自信をもって歩けるようになった香織。昇の動物病院まで無事たどり着くことができました。恐怖心で止まっていたおっばいが、安心で出るようになっていました。

第6巻では、つたい歩きをはじめた明光が保育園に通うようになります。朝のバイバイの場面で大泣きする明光。門の外で待っているしかないハッピーは明光が気がかりです。香織は「ハッピーも園内に入れてもらえるようになればきっと安心できる」と言いますが、園長は「まだお母さんたちの意見の一致が得られないんです」と理解を求めます。そんな中、年長児の裕太郎くんがハッピーを見て「大きいよ、怖いよ！ ぼく食べられちゃうよ！」と泣いてしまいます。

帰宅した香織のもとに園長から電話が入ります。「裕太郎くんの犬恐怖症を誰も知らなかったんですよ。盲導犬が園に来るとあらかじめお知らせしたときにも裕太郎くんのお母さんからもひとこともなくて。お母さんはこどもの犬恐怖症がおとなしい盲導犬とふれあうことでなおってほしいと期待していたそうで」「申し訳ないですけど、明光くんの登園お迎えの時間をずらしていただいて…」という依頼でした。ところがそれだけでは終わらず、それまでいばりん坊だった裕太郎くんは、皆から弱虫とからかわれ、ショックから登園拒否になってしまいました。

香織とハッピーが外出しているところを偶然見た、裕太郎くんのお母さんが声をかけます。香織は「いやな思いさせちゃってごめんなさい」と謝られ、ハッピーに問いかけます。「裕太郎くんにも伝えられない？ 分かりあえればこわくない。裕太郎くんがとっても好きよって」。香織とハッピーは裕太郎くんの家に呼ばれますが、裕太郎くんは怖がって布団の中に隠れてしまいます。

翌日、やはり登園拒否をする裕太郎くんに手を焼いた両親は、無理やり園に連れて行こうとします。そのとき、登園時間をずらしてもらった香織とハッピーと鉢合わせてしまいます。

ハッピーを見て大泣きする裕太郎くん。お父さんの腕から逃れて走り去ろうとします。そのまま走ると大通りまで行ってしまいそうです。お母さんが「止まりなさい！」と叫びますが、裕太郎くんは泣きながらそのまま走り続けます。

香織はハッピーに命じます。「裕太郎くんをつかまえて ハリアップ ゴー！」

ハッピーは裕太郎くんを追いつき、パニックになっている裕太郎くんの服をつかみました。

やがて落ち着いた裕太郎くんは、ハッピーのもとに歩いてきます。以前近所で飼われていた犬のチビコに噛まれたことが、犬恐怖症の原因だと両親は考えていたようでした。でも裕太郎くんは言います。

「チビコ、保険所にいっちゃったんだよ。ぼく小さかったから分かんなかった。保険所い

くとチビコが殺されちゃったんだよ。ぼく痛くなかった、ぼくけがしなかった。ぼくチビコ好きなんだよ…」「ぼく、小さいのやだ、弱いやだ、わかんないのやだ、ぼく怖いやだ！怖くないよ！」そうして裕太郎くんはハッピーに抱きつきます。

裕太郎くんのお母さんは香織に言います。「チビコが保険所に連れて行かれるのを見て見ぬふりしたわ…大きくなりすぎたチビコを、飼い主さんたち、もてあましてた。大人たちはだれも裕太郎ほど苦しまなかった。考えなかった」。

香織もこたえます。「ええ…チビコのしたことより、人間の大人のしたことのほうが、ずっと怖かったのかもしれない。裕太郎くん」。

もちろん好きだった犬に噛まれたことはショックだったに違いありません。ただ、その直後にチビコが姿を消してしまったことが、幼い裕太郎くんの心に、さらに大きな混乱を生んだのだらうと考えます。

大人たちは安全性を最優先に判断したのでしょう。しかしチビコが保険所で殺される事を、裕太郎くんに説明できるわけもなく、裕太郎くんは混乱の中に放置されてしまったのではないのでしょうか。

翌日、登園した香織とハッピーのもとに園長がやってきます。「今日からハッピーも園内に入れることになりましたよ。裕太郎くんのご両親が意見をとりまとめてくださって」。

ハッピーはたくさん子どもたちと触れ合うことができ幸せそうです。「わかりあえれば、こわくない。わかりあえれば、愛になる」という香織のモノローグで第6巻は閉じられます。

障がいをもつ人たちは、日々どのような困難を経験しているのでしょうか、そして周囲の人たちはどうサポートすればいいのでしょうか。『ハッピー！』は日常生活場面の中から、この問題を解きほぐし、障がい者のニーズに寄り添うことを教えてくれる作品です。